子規と滑稽（1）

八塚一青

滑稽俳句協会の設立挨拶に「この百年、全く光を当てられることなく埋もれてしまっていた滑稽を俳句に取り戻す」と宣言されています。俳句から滑稽が消えてしまった要因はいくつか考えられますが、それを考える際に、やはり近代俳句の父とも言われる正岡子規を避けて通ることはできません。今の俳句は子規が切り拓いた流れの先にあるものならば、その源流を見てみたいと思うのです。

ここで、本論に入る前に、どうしてもひとこと触れておきたいことがあります。それは、「坊っちゃんスタジアム」という名称についてです。私は、松山で生まれ育ちましたが、松山市民全員でもう一度考えてもらいたいのです。

松山市は、漱石の小説『坊っちゃん』を町おこしに活用してきました。松山市営球場が移転して松山中央公園野球場に変わった際、球場の愛称は公募によって「坊っちゃんスタジアム」になりました。

『坊っちゃん』は、作中で松山や松山人を貶しているので、それを町おこしに使うのはどうかという意見があります。しかし、私が言いたいのはこのことではありません。野球殿堂入りした子規を差し置いて、漱石の作品名が、市を代表する球場の愛称であることに違和感を覚えるのです。坊っちゃんスタジアムに併設する野球歴史資料館は、「の・ボールミュージアム」（ノボルは子規の幼名）と名付けられています。それならば、球場名も「ノボールスタジアム」にできるのではないでしょうか。音感もいいです。かっこいいです。このことは些細なことに映るかもしれませんが、あまりに子規に対して敬意、配慮が足りないと感じてしまいます。ご存知のように子規と漱石は盟友です。子規は超がつくほど野球を愛していました。漱石はさほどでもありません。子規と虚子や碧梧桐との出会いのきっかけも野球です。子規に今の「坊っちゃんスタジアム」のことを話せば、

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

彼はきっと表向きは平静を装うでしょうが、腹の底から悔しがるに違いありません。「どうして金之助（漱石）なんぞに。松山の球場やろうが」と。

今の大谷翔平の大活躍を子規にも見せたいなと思う時があります。二刀流の大谷に子規は大興奮することでしょう。子規にとって野球は、とても大きな意味があったものと感じます。病に侵され、野球ができなくなった時、彼の中で大きな変化があったと容易に想像ができます。

子規のベースは、野球を愛する心です。野球を楽しむ心です。野球という競技が、子規の心にあれほどまで響いたのは、如何にも文明開花の香りがあったからというのもあるでしょうが（子規は新しもの好き！）、野球の球を投げて、それを打つこと。打線を繋いでいくということ。野を走り、球を追いかけること。空の下でやること。遠くに球を投げること。それらが子規の感性に響くところが大きかったのだと思います。

スポーツ全般に言えることですが、野球は明るいです。その明るさに人は惹かれます。清々しさに感動を覚えます。野球は子規そのものだったのかもしれません。今からでも遅くありません。「ノボールスタジアム」に改名しましょう。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。